

日本文化からみる日本の相撲と立ち合い
A study of Japanese Sumo and “Tachiai” observe it as Japanese culture.

1K07B104-4

指導教員 主査 寒川恒夫 先生

澤口 大和

副査 杉山千鶴 先生

【1 序章】

世界には世界基準になっているスポーツからその地域限定のスポーツがある。その中には力比べを目的にしたもの、豊作を願う祭りや収穫を祝う祭りを主としたものなど多くのスポーツが存在し、その数は計り知れないだろう。そこには、独自のルールやエートスが存在し、広範囲へと成長し明確なルールがつくられるものから、独自のカタチを頑なに守っているものまでそれぞれある。どの分野のスポーツにも似ておらず我が道を進み続ける相撲には、どれだけ日本文化の影響を受けているのだろうか。また、独特の競技開始合図（仕切り）にもどのような影響を与えているのであろうか。日本の相撲と外国の相撲を比較したうえで、日本の相撲を文化的視点から観察し、独特な立ち合いも交えながら日本文化とどのような関係をもっているのかを明確にしていく。

【2 相撲とは】

日本における「相撲」とは2人の力士が土俵で競い合い、土俵の外に身体の一部がつく、もしくは足以外の身体の一部が土につくことによって勝敗を決める。相撲の始まりは『古事記』や『日本書紀』であるが、「相撲」と明記してはいないものの相撲であると連想させられるものは複数存在している。世界各国で行われているスポーツであり、ルールに違いはあれど内容はほとんど違いがない。その中でも、日本の相撲は独自の発展を遂げ、世界中から注目される「国技」へと進化し続けているが、発展を遂げているにも関わらず、神道や「わび」「さび」「もののあわれ」といった日本独自の文化を強く押し出している。

【3 競技開始合図】

ジャンプボールやサービス、カウントダウンなどたくさんの競技開始合図が存在する。その中でも日本の国技「相撲」は別格ではないだろうか。まず、審判である行司が明確な競技開始合図を出さないこと。次に、競技開始を何度もやり直すことができること。極めつけは、行司を通さず両競技者の合意で始まるということだ。自分の呼吸を相手に合わせることと、相手の呼吸に合わせない（すきを突く）を同時に行っている。競技開始時に審判が仕切るか、

選手に任されているかというものである。相撲のやり方ならばスポーツ選手はのびのびとした試合ができ、全ての力を両選手のベストなタイミングで繰り出せる為、試合展開も面白みが増すであろう。それは、より白熱した試合ができるほか、観客にも興奮を与え選手と観客の良い循環ができると考えられる。

【4 相撲と日本文化】

高見盛の顔を叩き気合いを入れるパフォーマンスや朝青龍の腰を大きく叩くパフォーマンスには、観戦している我々にも気合いが入る。一方、ガッツポーズといった勝利や喜びを表に出すようなパフォーマンスは好まれておらず、注意を受ける力士がいる。近いところでは、朝青龍が土俵上でガッツポーズをしたことがあったがこれは一部のメディアにも叩かれていた。柔道や剣道といった武道系のスポーツには、古くから勝負に勝っても表に出さないということが作法として用いられてきた。他の競技や国際大会ではガッツポーズも珍しくないが、相撲には大相撲・アマチュア関係なく厳粛な空気が残っているようだ。貴花田などの力士が金星をあげてもニコリともしないのには、相手の気持ちを考えろという教えでもあるように思える。

【5 終章】

日本の相撲には日本文化が大きな影響を与えているといえる。それは、土俵を神聖な場所と捉えることに関係する「神道」、呼吸を相手に合わせながらもずらしすきを突く「武術（武道）」的な考え、立ち合いで相手の気持ちを察する「わび」「さび」、確実な勝敗が分かってからの無理な取り組みはしない「もののあわれ」、相手に勝利してもガッツポーズなど喜びを全面に出さない「いき」、極めつけは、日本人独特の表現方法「曖昧」。これら全てを兼ね備えているものが相撲である。大相撲のすみからすみまでが日本文化そのものであり、日本の国技と称されるだけの価値がそこには存在した。そして、行司が立ち合いを両力士に任せていることも、これらの日本文化が身体に染み込んでいる力士にだからこそできる業である。阿吽の呼吸が観客の目をくぎ付けにし、相撲の面白さをより一層引き立てている。